

音楽科

高崎 晴香 谷川 礼恵

1 音楽科における学び続ける子供とは

音楽科における学び続ける子供とは、音楽的な見方・考え方を働かせながら音楽活動の楽しさを実感し、音や音楽と豊かに関わり続けようとする子供である。

(1) 「音楽的な見方・考え方を働かせる」とは

「音楽的な見方・考え方を働かせる」とは、音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情等と関連付けることである。子供は音や音楽に出合ったとき、音や音楽を聴いて自分の感情が沸き起こるのを感じ取ったり、音楽がどのように形づくられているかなどの音楽の構造に気付いたりする。その過程で音楽を形づくっている要素の働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取っていく。

第2学年「おまつりの音楽をつくろう」では、教師が作曲した「笛の旋律」とリズム・パターンをつなげた「太鼓のリズム」を組み合わせ、祭りばやしの音楽づくりを行った。笛の旋律に含まれる反復と変化に着目した子供は、「途中でリズムが細かく変化するところが、一気に盛り上がる感じがして面白いよ」と感性を働かせた。太鼓のリズムをつくる際には、「太鼓のリズムにも反復と変化を使ってみよう」「笛の旋律に合わせて、変化の部分は細かいリズムで太鼓を打つと盛り上がりそうだ」と、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉えた。子供は反復と変化を用いながら音楽をつくり、その面白さを体感することを通して、考え（表現を含む）に自信をもっていった。これは、自己のイメージや感情と音楽を形づくっている要素の働きを関連付けて表現する子供であり、音楽的な見方・考え方を働かせている子供の姿である。

(2) 「音楽活動の楽しさを実感し、音や音楽と豊かに関わり続ける」とは

「音楽活動の楽しさを実感し、音や音楽と豊かに関わり続ける」とは、主体的、創造的に表現や鑑賞の活動に取り組む中で、友達と気持ちを合わせて音楽表現をしたり、思いや意図をもって表現をしたり、音楽を味わって聴いたりする楽しさを実感し、その楽しさを求めて音や音楽に繰り返し関わり続けようとすることである。

先の事例で、「変化の部分には細かいリズム・パターンをつなげるとよい」と考えた子供は、「変化の部分にはあえて休符のあるリズム・パターンをつなげるとよい」というA児の考えを聞き、自分の考えとのズレに気付いた。休符を入れた理由を知りたくなった子供は、A児の表現を追体験したり対比する表現と聴き比べたりする中で、「休符があると笛の旋律の音が聴き取りやすい」という休符のよさを体感した。また、A児の「笛の旋律の音を目立たせたい」という思いを聞き、あえて休符が含まれたリズム・パターンを選択することにより、A児の思いが表現につながっていることに気付いていった。そして、「自分をつくりたい音楽に合ったリズム・パターンを本当に選んでいるのか」と問いをもった子供は、自分の考えを見直したいと感じ、再び音楽に関わりを求めていった。その際、「笛の旋律の音がよく聴こえるようにするためには、どのリズム・パターンが一番いいのかを何度も試したよ」というA児の体験を生かし、試行錯誤する中で、自分の思いを明確にしながら表現をよりよくしていった。このように、子供は思いをもって主体的に、創造的に表現をする中で、音楽活動の楽しさを実感し、音や音楽に豊かに関わり続けるのである。

2 学び続ける子供を育てるには

(1) 子供が必要感をもって学習対象と関わるために

① 魅力的な教材を選択し、提示の仕方を工夫する

教材は子供の実態を把握し、実態に応じて子供が音楽のよさを十分に感じ取ることができる、魅力的なものを選択する。提示の際には、教材のもつ魅力的な部分に絞って提示したり、音楽活動のゴールの姿を提示したりするなど、子供が必要感をもって音楽活動に取り組むことができるようにする。

② 音楽と十分に関わる場を保障する

子供が納得できる考え（表現を含む）を構築するために、必要な技能を身に付ける時間を保証する。そして、考えを構築する過程において、教師は音楽を形づくっている要素と子供の考えを結び付ける。これにより、子供の考えに明確な根拠が生まれ、子供は自分の考えに自信をもてるようになる。

(2) 子供が自ら問いをつくるために【重点】

① 互いの考えを共有するための、聴き合いや意図的指名

自分の考え（表現を含む）に自信をもった子供は、考えを確かめたくなり、友達に関わりを求める。その段階で、教師は子供同士が考えを共有する場を設定する。その際、音楽を形づくっている要素を絞った聴き合いをしたり、価値ある考えをもっている子供を意図的に指名したりし、互いの考えの中にズレがあることに気付かせる。

② ズレの要因を明らかにする、音楽の可視化や表現の追体験

ズレを感じた子供は、自分の考えを説明しなくなったり、友達の考えを知りなくなったりする。教師は子供が互いの考えの根拠を理解できるようにするため、図形楽譜やリズム譜等を用いて、音楽を形づくっている要素を可視化する。これにより、子供は互いの考えの根拠となる音楽を形づくっている要素を共有し、その働きに着目しながら音や音楽を聴くことができる。また、子供が表現に対する思いや意図、考えの背景等について実感を伴った理解ができるように、互いの表現を追体験する場を設ける。これにより、子供は表現に含まれる音楽のよさや面白さ、美しさ等を体感し、ズレの要因を明らかにしていく。

③ 問いをつくるための、子供の表現に対する思いの明確化

追体験や可視化等を通してズレの要因を明らかにした子供は、ズレの要因が表現に対する思いに基づいていることに気付き、「自分はどのような音や音楽を求めるのか」という思いに立ち返っていく。教師は子供一人一人がもつ表現に対する思いを明確にさせることで、子供に本気で考えたい問いをつくらせる。

(3) 子供が自ら問いを解決するために

① 子供が欲している音楽を形づくっている要素に焦点化し、追体験や聴き比べの場を設定する

子供は問いを解決するため、問いをつくる際に追体験した表現を自分の思いに合わせて試しなくなる。教師は子供を見とりながら、子供が欲している音楽を形づくっている要素に焦点化し、必要に応じていくつかの表現を追体験したり、聴き比べたりする場を設ける。これにより、問いを解決のための視点を見付けられるようにする。

② 再び音楽に関わる場を保証し、考えを再構築する

解決のための視点を見つけた子供は再び音楽に関わりを求める。教師が再度音楽に関わる場を保障することで、子供は表現を試行錯誤し、自分の表現と思いを照らし合わせ、考えを再構築していく。